

# 私立豊橋裁縫女学校の校地と校舎の変遷について

—明治35年から昭和7年まで—

伊藤晴康

本稿は藤ノ花学園の起源である私立豊橋裁縫女学校について、設立された明治35（1902）年から現在の藤ノ花女子高等学校の校地に移転する昭和7（1932）年までの間の校地と校舎及び周辺環境について、学園に保管されていた当時の公文書等の資料を元にその変遷を明らかにし、一部を図面化したものである。

キーワード：学校施設 学園史 豊橋裁縫女学校 藤ノ花学園 藤ノ花女子高等学校

## 1. はじめに

藤ノ花学園の起源である私立豊橋裁縫女学校<sup>1</sup>が創立されて以来、本年（2011年）で109年が経過した。設立当初から昭和7（1932）年までは豊橋市の中心部に校地があったが、当時の校地と校舎については、卒業アルバムや学園の記念誌等に掲載された断片的な記録が知られているのみである。当時を知る関係者がすくなくなっているなかで、学園の歴史資料として設立当初の教育施設の変遷過程を明らかにする目的で本稿を執筆した。

## 2. 学園公文綴より得られる知見

藤ノ花学園本部には、創設以来の公文書が「公文綴」という名称で冊子に綴じられた状態で保管されている。（以下当該資料を「公文綴」とする）数年を単位として冊子の形で紐綴じされ、表紙をつけてまとめている。保存されている文書は、公的機関に提出された申請書等の控え、公的機関から受領した文書、その他対外的に発送された重要文書の写し等である。各文書は、ほぼ時系列に対応した順序で冊子に綴じられている。私立豊橋裁縫女学校が設置された1902年（明治35年）からの記録が残されているが、大正5（1916）年から大正7（1918）年までの間の記録については紛失している。

校地と校舎の面積に関しては、年度初めに豊橋市宛に提出していた学校統計等にほぼ毎年同じ様式で数値が記載されており、表-1にまとめた。また、定員増加や校地移転の際には、愛知県知事宛の申請書や届出書を提出しており、その中に校地と校舎の平面図が添付されて

---

1 私立豊橋裁縫女学校は、その後大正8（1919）年に豊橋裁縫女学校、昭和6（1931）年に豊橋高等裁縫女学校、昭和10（1935）年に豊橋高等家政女学校、昭和21（1946）年に豊橋藤花高等女学校と名称を変え、昭和23（1948）年より現在の藤ノ花女子高等学校となっている。

いた。また、年によっては各種報告書にも図面が添付されている。その他のものも含め、「公文綴」に保存されていた校地と校舎に関する図面の一覧を表-2に示す。なお、表中「家屋坪数」は、図面との照合の結果、現在の建築面積に相当する面積を坪数で表したものと判断した。また、「教室坪数」「寄宿舎坪数」は該当する室の面積の合計を坪数で表したものである。

表-1 「公文綴」に記載のあった校地と校舎の面積に関する事項一覧表

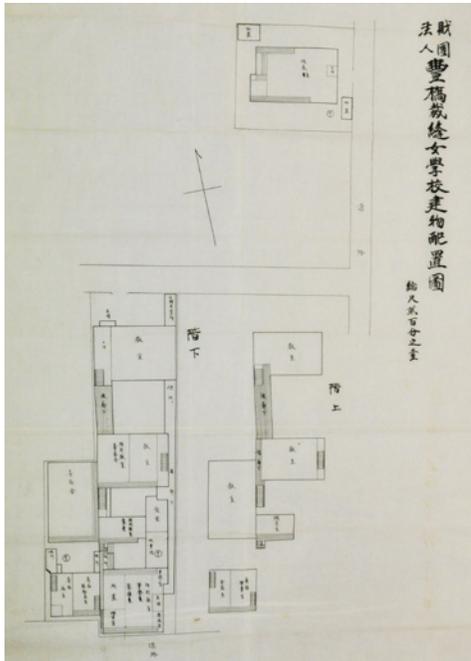
年 月 日	資 料 名	敷地 坪数	教室 数	教室 坪数	家屋 坪数	寄宿舎 坪数
明治36年5月1日	私立豊橋裁縫女学校一覧表 (資料5-3)	60坪	1	20坪	31坪	—
明治37年5月1日	私立豊橋裁縫女学校一覧表 (資料5-4)	60坪	1	20坪	31坪	—
明治38年5月1日 ～明治43年5月1日	私立豊橋裁縫女学校一覧表 (資料5-7, ~5-10, 5-12)	225坪	3	60坪	121.5坪	35坪
明治44年5月1日 ～大正9年5月1日	私立豊橋裁縫女学校一覧表 (資料5-13, ~5-17, 5-18*)	225坪	5	67坪	121.5坪	35坪
大正10年1月	学校一覧に関する件等照会 回答 (資料5-20)	225坪	5	67坪	121.5坪	58坪
大正10年5月	学事年報取調条項 (資料5-21)	225坪	6	87坪	121.5坪	58坪
大正12年4月	私立豊橋裁縫女学校一覧表 (資料5-24)	225坪	5	67坪	121.5坪	58坪
大正14年5月	学事年報取調条項 (資料5-27)	305坪	7	133.5坪	215坪	41坪
大正14年10月13日	私立学校調査 報告 (資料5-28)	305坪	7	135坪	208.54坪	41坪
大正15年6月	豊橋裁縫女学校要覧 (資料5-29)	305坪	7	135.5坪	208.54坪	41坪
昭和2年6月	学事年報取調条項 (資料5-30)	305坪	7	133.5坪	208.54坪	41坪
昭和3年8月14日	豊橋市照会事項への回答 (資料5-31)	305坪	—	—	208.54坪	—
昭和4年5月14日	学事年報取調条項 (資料5-32)	305坪	7	133.5坪	208.54坪	41坪
昭和4年7月	実業学校設置認可稟申 実業学校設置廃止規則第1条 ニヨル事項 (資料5-34)	399坪 7合	記載なし 図面を添付 (この敷地面積のみ北側飛び地の面積 を含む)			
昭和5年4月30日	昭和4年度取調条項 (資料5-36)	288坪	7	133.5坪	200.29坪	41坪
昭和6年4月30日	昭和5年度取調条項 (資料5-37)	288坪	7	133.5坪	200.29坪	41坪

\*表中、資料5-18の名称は、名称変更により「豊橋裁縫女学校一覧表」である。

表-2 「公文綴」に保存された図面類一覧

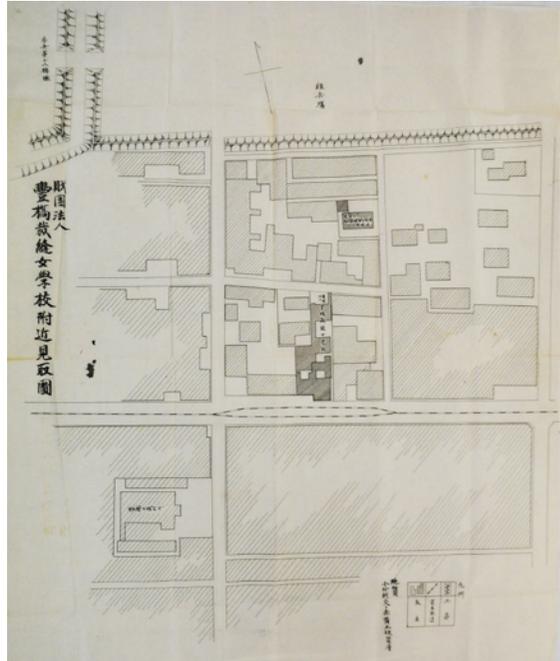
年 月 日	図 面 の 概 要
明治35年3月31日	「私立学校設立認可申請書」(資料5-1) 添付 1. 「当分仮ノ校地校舎ニ充用スルモノ」(図-1) 縮尺なし 各所に寸法の記載あり
明治35年6月1日	「私立学校校地校舎変更ニ付開申」(資料5-2) 添付 1. 「其一 校舎」縮尺なし 各所に寸法の記載あり(図-2) 2. 「其二 校地」縮尺なし 敷地二辺について寸法の記載あり
明治37年7月12日	「私立学校校地校舎変更ニ付開申」(資料5-5) 添付 1. 「校地校舎ノ図」縮尺なし 各所に寸法の記載あり
明治37年7月12日	「私立学校寄宿舎設置ニ付開申」添付(資料5-6) 1. 「寄宿舎ノ図」縮尺なし 各所に寸法の記載あり(図-3)
明治42年5月17日	「豊橋市長宛報告書」(資料5-11) 添付 1. 「校地校舎附近建物ノ図」縮尺なし 各所に寸法の記載あり
大正11年10月2日	「伊藤太郎氏宛書簡控」(資料5-23) 添付 1. 題名なし(本文説明のための概略図)
大正13年3月4日	「私立学校規則一部変更ニ付認可申請」(資料5-25) 添付 1. 「豊橋裁縫女学校校舎図」縮尺1/200 各所に寸法の記載あり
大正14年10月13日	「私立学校調査 報告」(資料5-28) 添付図面(すべて縮尺なし) 1. 「豊橋裁縫女学校校舎略図」(校舎配置図) 各所寸法の記載あり 2. (校舎1階平面図) 各所寸法及び室面積の記載あり 3. (寄宿舎平面図) 各室面積の記載あり 4. (南側事務棟及び西側校舎1階平面図) 各室面積の記載あり 5. (西側校舎2階平面図) 各室面積の記載あり 6. (教室平面図 2階 2階渡り廊下あり) 各室面積の記載あり 7. (南側事務棟平面図) 各所寸法及び室面積の記載あり 8. (教室平面図 2階 2階渡り廊下なし) 各室面積の記載あり 9. (教室1階平面図) 各所寸法及び室面積の記載あり 10. (事務棟1階平面図) 各所寸法及び室面積の記載あり
昭和4年7月	「実業学校設置認可稟申」(資料5-34) 添付 「財団法人豊橋裁縫女学校建物配置図」縮尺1/200(図-4) 「財団法人豊橋裁縫女学校附近見取図」縮尺なし(図-5)





出典：「公文綴」昭和4年7月付  
「実業学校設置認可稟申」（資料5-34）

図-4 建物配置図



出典：「公文綴」昭和4年7月付  
「実業学校設置認可稟申」（資料5-34）

図-5 附近見取図

### 3. 『藤ノ花学園史』より得られる知見

『藤ノ花学園史』は昭和44（1969）年に藤ノ花学園により発行された学園の記録誌である。明治35（1902）年から昭和44（1969）年まで、年ごとに主な出来事が日付と共に記述され、併せて当時在学した卒業生の手記が掲載されている。『藤ノ花学園史』の年代記の多くは前述の「公文綴」の記録を元に作成されている。『藤ノ花学園史』においても、2章で述べたように大正5年から大正7年までの間の記録が残っていないと記述されており、昭和44（1969）年の時点ですでに当該期間の「公文綴」が失われていたことがわかる。

『藤ノ花学園史』昭和4年の項目には、開設以来の学校の変遷をまとめた記述があり<sup>2</sup>、校地と校舎及び学則定員に関する抜粋を表-3にまとめた。表中の学則定員とは、『藤ノ花学園史』の他の記述と照合すると学校全体の収容定員のことでありと判断される<sup>3</sup>。なお、一部の記述には、「公文綴」中の記録と矛盾するものがあつたため、「公文綴」より「豊橋裁縫女学校要覧」（資料5-29）に記載された「沿革略」の記述により訂正と追記を行っている。

2 「公文綴」昭和4年の冊子中には「学校創立後ノ大要」に対応する文書はないが、資料5-29「豊橋裁縫女学校要覧」に大正13年までの沿革が記載されており、内容が一致する。ただし大正6年の校地購入については、資料5-29には記載がない。

3 年ごとに学科・学年別の在籍者数の記録があり、この合計と学則上の定員とを比較した。

表-3 「学校創立後ノ経過ノ大要」抜粋及び一部修正

年	月 日	記 載 事 項
明治35年	4月8日	私立学校令ニ依リ各種学校トシテノ愛知県ノ認可ヲ得同日11日豊橋町大字中八46番戸ノ民家ヲ借受ケ校舎寄宿舎ニ充テ私立豊橋裁縫女学校ト称シ伊藤卯一校主トシテ開校セリ当日入学者14名同月末ニ至リ22名トナレリ
	6月1日	校舎不便ヲ感シタルニヨリ同町大字137番戸ノ家屋ヲ借受ケ移転シタリ
明治36年	11月	同町大字中102番戸ノ家屋を借り寄宿舎トナシ教室ヲ拡張セリ
明治37年	6月1日	現在ノ校地ヲ借入レ校舎1棟ヲ新築シ在来ノ家屋ヲ併セテ教室並事務所トス同日開申寄宿舎位置変更東八137番戸ニ置ク*注1
	8月1日	学則1部ヲ変更シ編物料ヲ廃シ定員100名ナリシヲ200名トス
明治38年	5月	教室前寄宿舎ヲ増築シ東一三七番ノ寄宿舎ヲ廃ス*注2
大正6年	4月	校地79坪3合4勺及家屋ヲ購入ス*注3
大正9年	10月7日	定員ヲ250名トス
大正13年	3月14日	定員ヲ350名トス
大正13年	6月25日	教室及寄宿舎ヲ増築ス*注4
昭和4年	4月	寄宿舎ノ一部ヲ改築ス

出典：『藤ノ花学園史』pp.124-125及び「豊橋裁縫女学校要覧」（資料5-29）

\*注1：この1行は「豊橋裁縫女学校要覧」（資料5-29）の記述により追記

\*注2：『藤ノ花学園史』では、「中八ノ寄宿舎を廃ス」であったが、資料5-29の沿革の中で当該項目が手書きにて訂正されていたので、訂正後の記述を採用

\*注3：当該年の「公文綴」が失われているため、「公文綴」に記録なし

\*注4：『藤ノ花学園史』では、大正14年10月であるが、「公文綴」資料5-26に記載のある年月日を記載

#### 4. 校地周辺環境に関する資料

東八町校地の周辺環境については、『藤ノ花学園史』や「公文綴」に加え、当時の地図及び写真も参考とした。図-6は、大正5（1916）年の豊橋裁縫女学校卒業アルバムに使用されていた校舎写真である。図面との対応関係から、敷地北側の道路より撮影されたものであることがわかる。この時点では敷地西側は空地となっていたことが確認できる。図-7は、正確な発行年月が不明で、地図を所蔵する豊橋市図書館の蔵書資料によれば「昭和初年」とされている。東八町に「裁縫女学校」の記載があり、学校の記号の左側に記載された黒塗りの三角形の記号は、凡例によれば刑務所を示す。図-8は豊橋市美術博物館が所蔵する大正7（1918）年頃撮影された豊橋市街地の航空写真の一部を拡大したものである。当時の校地は、地図と照合し街区の形状から特定することができる。斜め上空から撮影されており、二階建ての校舎や『藤ノ花学園史』に掲載された卒業生の手記<sup>4</sup>に見られる八町通り沿いの松の木と思われる樹木が確認できる。二階建て校舎の南側には規模の小さな建物が写っており、図面に記録された校舎配置と一致することが確認できる。

4 『藤ノ花学園史』昭和5年の項目（pp.130-131）に掲載された卒業生三好まさ子氏による「思い出」という文章中に、「樹齡何百年もたつ老松が、昇竜の如く街に伸びて、目標になっていました」という記述がある。

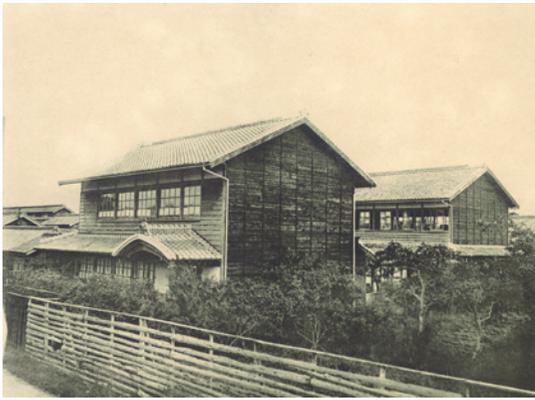
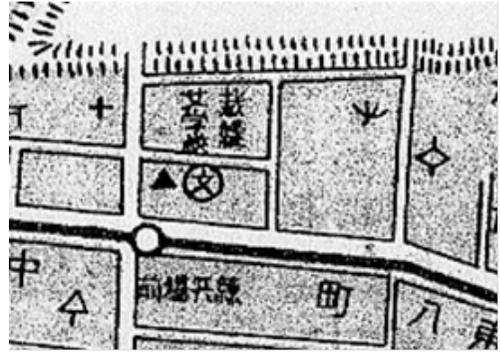
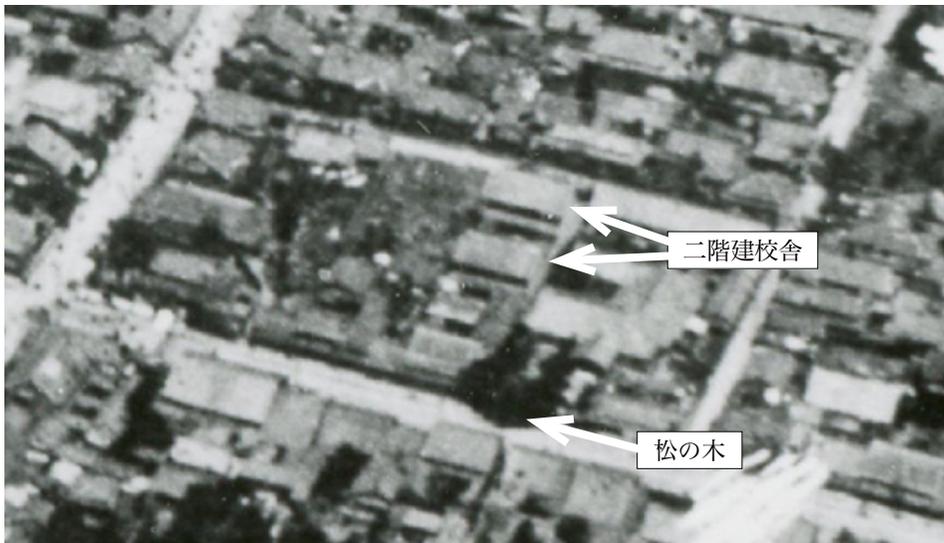


図-6 大正5(1916)年の卒業アルバムに使用された校舎写真(資料1)



出典：「豊橋市街地図」(資料2)

図-7 昭和初年の校地周辺



出典：「豊橋市街地中央部航空写真」(資料3)を一部拡大し追記

図-8 校地周辺航空写真

## 5. 校地と校舎の変遷

2章から4章までにわたり説明した資料に基づき、私立豊橋裁縫女学校の校地と校舎の変遷をたどる。前述表-2のうち、大正13年と昭和4年の校舎平面図には縮尺が記載されている。特に、昭和4年の図面は、専門家の手によるものと推察され、以前の図面と比較して精度が高い。したがってこの図面の敷地形状と建物配置から、以前の時代の建物の配置もほぼ正確な平面図として再現することができた。校舎の増改築のあった時期ごとに、明治37(1904)年(図-9)、明治38(1905)年(図-10)、明治44(1911)年(図-11)、大正11(1922)年(図-12)、大正13(1924)年(図-13)、昭和4(1929)年(図-14)の各時点での平面図を作成した。

### 5-1. 創立当初の校地

私立豊橋裁縫女学校は明治35（1902）年に伊藤卯一によって創立された。「公文綴」明治35年3月31日付「私立学校設立認可申請書」（資料5-1）の中に「位置」として「愛知県渥美郡豊橋町大字中八町四十六番戸」との記載がある。この住所は申請者として記載された伊藤卯一の現住所と同じである。同申請書の「理由書」という項目には、「将来ハ別紙図ノ如ク校舎ヲ建築シ 定員百名ヲ収容スルノ計画ニテ前記ノ経費維持方法ヲ立ツルト雖モ当分ハ家屋ヲ賃借シテ 仮ニ校舎ニ充用シ 生徒数最少限度ヲ三十名ト見積リ 東修並月謝合計ノ収入ヲ以テ家賃年額扣除シ 其余ヲ諸雑費並教師給与ヲ支給セントス」との記述があり、当初の校舎は借用したものであり、臨時の校舎という位置づけであったことがわかる。なお、同申請書には、設立時の校舎の平面図を描いた図が添付されている（図-1）。図の寸法表記により設立当初の校地は間口7間、奥行9間、敷地面積63坪であったことがわかる。また、同図には将来計画として別の校舎の平面図も併せて描かれている。しかしながら、この後の将来計画図通りの建物が建設された記録はない。

### 5-2. 1回目の移転

設置直後の明治35（1902）年6月には、校舎を東八町137番戸に移転している。「公文綴」中、35年6月1日付「私立学校校地校舎変更ニ付開申」（資料5-2）には、校舎平面図（図-2）と校地の図面が添付されている。図面の左側に「備考 当分二階ヲ以テ教室ニ充テ生徒増員スルニ從ヒ階下校主住宅ノ一部若クハ全部ヲ教室ニ充テントス」との記載がある。また、校地の図面から校地は10間×6間であり敷地面積は60坪の長方形であったことがわかる。なお、この際の建物も自己所有でなく、借家であったことが表-3より確認できる。東八町137番戸の建物は明治37（1904）年の校舎移転の後は寄宿舎に転用され、「公文綴」明治37年7月12日付「私立学校寄宿舎設立ニ付開申」（資料5-6）の中に平面図が残されている（図-3）。なお、この寄宿舎は、明治38（1905）年に校舎増築に伴い寄宿舎が移転先の校地に統合されたため、廃止されている。また、明治36（1903）年には中八（中八町）102番戸の民家を借り寄宿舎として使用したという記録があるが、この建物についての資料は見つかっていない。この寄宿舎は翌年には前述の東八町137番戸に移転している（表-3）。

### 5-3. 2回目の移転

設立3年目の明治37（1904）年に東八町10番地及び250番地2の校地に移転した。番地は複数であるが、一体の校地である。この年に定員を100名から200名に増加させている。この際、校地は借用であり、校舎1棟を新築し、さらに借用した既存の家屋も活用して教室や事務所に利用したことが、表-3より確認できる。その後昭和7（1932）年に現在の藤ノ花女子高等学校の校地に移転するまではこの校地にとどまり、校舎及び寄宿舎の増築並びに校地の拡張を行っている。

この敷地の形状については、明治37（1904）年の図面（資料5-5）では、長方形に描かれている。敷地面積は、東西7間半、南北30間という図面の記載に対応して、225坪とされている。

る(表-1)。しかしながら、昭和4(1929)年に提出された「実業学校設置認可稟申」に添付された図面(資料5-34)では、北側の幅が南側に比べてやや幅広く描かれている。この違いは、移転当初には正確に敷地形状を測量せず、敷地形状を長方形として描いていたために生じたと推察される。敷地は北側と南側で道路に接しており、北側に正門、南側に通用門を設けている。『藤ノ花学園史』に掲載された卒業生の手記の中には、正門を「表門」<sup>5</sup> 通用門を「裏門」<sup>6</sup>と記述したものがみられる。卒業生の手記より、通用門から生徒が出入りしていたことがわかる(下記注6)。通用門が設けられていた敷地南側の八町通は大通りであり、通用門側がより中心市街地に近いことから、生徒の通学には通用門が便利であったと推察される。なお、正門から常時生徒が出入りしていたのか否かは明らかでない。

明治37(1904)年の移転当初の状態では、敷地の中央に広い空地があったことがわかる(図-9)。この時点では前述のとおり寄宿舎は直前の校舎を利用しているため、この図面には寄宿舎が含まれていない。明治38(1905)年には前年に建設した校舎の南側に校舎を一棟増築している(図-10)。この際に寄宿舎も同じ敷地に移転してきた。なお、明治42年の図面(資料5-11)では敷地西隣の建物が追記され、「校主住宅ノ一部」との記載がある。なお、この土地はその後大正6(1917)年に伊藤卯一が購入<sup>7</sup>しているため、この時点では借地である。

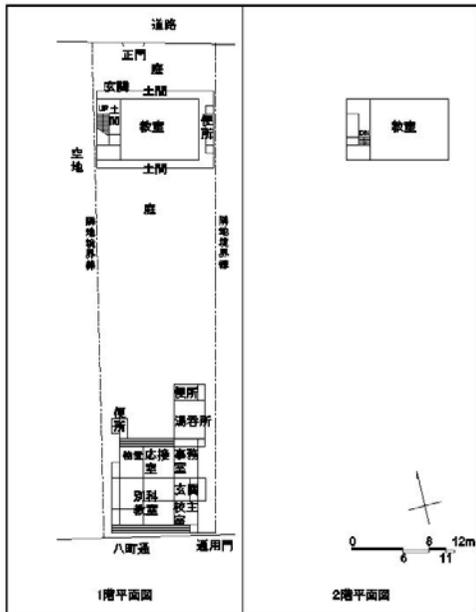
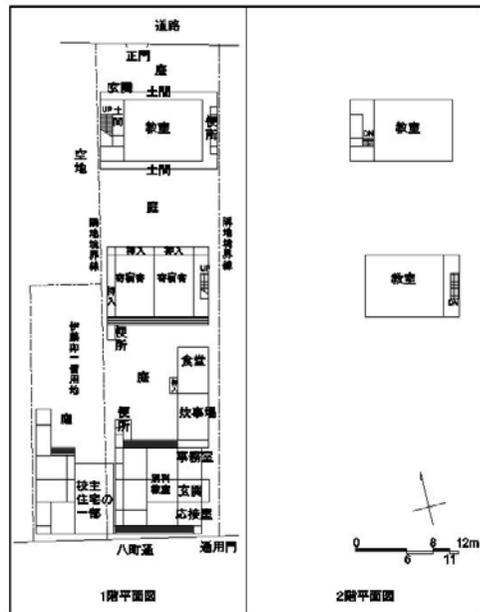


図-9 明治37年移転当初の校舎配置



敷地西隣の住宅の記載は明治42年の図面による

図-10 明治38年 校舎1棟を増築

5 『藤ノ花学園史』 p.28 (明治42年の項目) 菰田なみ「思い出の学舎」「兵舎から流れ来たラッパの音も勇ましく、練兵場に面した高い建物こそ母校私たちの教室は、表門にそって二階の大広間見晴しもよく静かで勉強には恵まれた事、(以下略)」。

6 『藤ノ花学園史』 p.49 (大正3年の項目) 奥瀬よね「思い出」「あの八町通の裏門より事務の前を通り教室に入った、又川原に(スミス)の中返りも見に行きました。」

7 表-3 大正6年の項目参照。

その後、敷地南側八町通り沿いの建物と中央の校舎との間にさらに一棟小規模な2階建ての校舎が増築されている。増築の時期は、表-1の教室数と教室面積との比較から明治43(1910)年のことであると推察される(図-11)。しかしながら、「公文綴」明治43年の記録にはこの増築に関する資料は含まれていない。また、表-1で、明治43年から明治44年にかけて、教室数と教室坪数についてはこの増築部分に対応して増加しているのに対して当然増加するはずの家屋坪数が増加していない。

#### 5-4. 刑務支所建設への対応

大正11(1922)年には2棟の教室をつなぐ渡り廊下を2階建てに増築している(図-12)。この経緯については西隣に建設された刑務支所<sup>8</sup>が影響している。「公文綴」中に大正10年12月付の豊橋警察署長宛の陳情書及び名古屋監獄典獄宛の陳情書が残されており、『藤ノ花学園史』大正10年12月2日の項目にも、「東八地内に監獄の出張所が建設されるのを聞き、豊橋警察署長および名古屋監獄典獄へ教育上有害であるから、他へ計画せられるよう、陳情書を提出する」との記載がある。また、「公文綴」中に翌大正11年10月2日付で、土地建物の貸主伊藤太郎氏宛の手紙の控<sup>9</sup>が保管されており、文中「今回ハ監獄拘禁所ヲ隣接地ニ設置セラルルニ依リ教育上其展望ヲ避クルノ必要ニ迫リ教室ト教室トノ間ノ西側渡リヲ自費ニ

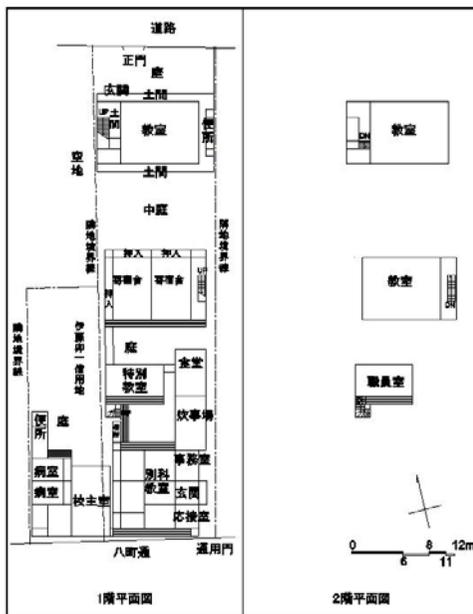


図-11 明治44年 校舎増築

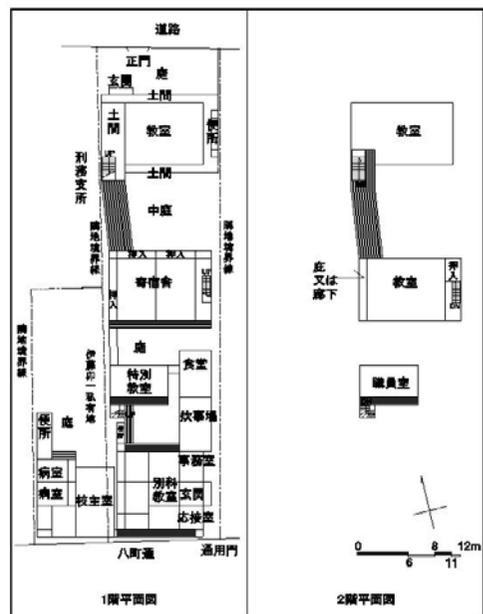


図-12 大正11年 渡り廊下を2階建てに増築

8 資料5-22では、「監獄出張所」と表記しているが、地図(資料4)で当該施設を「刑務支所」と表記しているため、本稿では、「刑務支所」という。

9 資料5-23 賃貸主に対し、借用している家屋の増築の許しを得、返却の際の取り決めを記録した手紙。説明のための図面が1枚添付されている。

テ朱線ノ如ク二階建ト致度御承諾ヲ得候」との記述があり、陳情にも関わらず東八町に監獄が建設されたことが確認できる。また、渡り廊下を2階建て増築したのは、刑務支所との間の視線を遮る必要が生じたことへの建築的な対応であったことがわかる。なお、この際の増築範囲には、一部不明な個所があり、図-12中に「庇又は廊下」と記載してある。この部分は当初は下階押入の上部庇であったが、大正13(1924)年の図面では上部に増築して廊下になっている。大正11(1922)年の時点ではこの部分を廊下にする機能的な必然性がないため庇のままであったのか、その時点で2年後の増築を見越して廊下としたのかは明らかでない。

### 5-5. 敷地の拡張と校舎増築

大正9(1920)年に定員を200名から250人に増加し、さらに大正13(1924)年には定員を350人に増加させている。この対応として大正13(1924)年に校舎を一棟増築し、二階を教室、一階を寄宿舎としている(図-13)。「公文綴」大正13年11月23日の校友会総会での報告事項の記録では、大正13年6月25日に増築校舎の落成式が行われた旨の記録がある(資料5-26)。

表-1では、大正12年から13年にかけて敷地面積が80坪増加している。この面積は表-3大正6年の項目にみられる「校地79坪3合4勺及家屋ヲ購入ス」とある面積とほぼ等しく、また、当初の敷地の西側に追加された敷地の面積を図面上で算出したものとも近い数値である。従って当初は伊藤卯一が個人住宅として借用し、校舎にも充用していた土地建物を大正6年に伊藤卯一が購入し、大正13年より統計上の校地坪数に算入したものと考えられる。なお、この79坪3合4勺という面積は、この後昭和2(1927)年に学園が財団法人化された際に寄附行為第1条<sup>10</sup>に表記された宅地(豊橋市東八町十一番十一ノ二)の面積と等しい。

なお、図-4、図-5にみられるように、昭和4(1929)年の時点では、八町通り沿いの校地から北側に飛び地としてもう一つ校地(東八町253番地)が存在している(図-15)。「公文綴」の記録では、東八町253番地は所有者伊藤卯一より財団法人豊橋裁縫女学校が昭和4年4月1日より無償で借用しているとされている<sup>11</sup>。表-1中、敷地坪数には昭和4年「実業学校設置認可稟申」以外ではこの土地の面積は算入されていないが、家屋坪数については、大正13年から14年にかけての面積増加は、この飛び地の建物の面積が含まれている。

### 5-6. 校地の狭隘化と移転への動き

昭和4(1929)年には敷地南側の八町通を走る路面電車の待避所を設けるために道路が拡張され、敷地面積が減少すると共に敷地内南西にあった平屋の建物が建築面積を縮小し二階建てとなっている。表-3に掲げた『藤ノ花学園史』の記述では、昭和4年4月に「寄宿舎ノ一部ヲ改築ス」とある。また、この時点の図面<sup>12</sup>では敷地内いちばん北側の校舎1階部分の教室周囲にあった土間が教室に取り込まれる形で教室が拡張されているが、拡張された時期については記録がなく、表-1の教室坪数は大正13年から変化していない(図-14)。当該図面では、

10 『藤ノ花学園史』p.111.

11 資料5-35 昭和4年7月20日付「豊橋税務署長宛証明書」。

12 資料5-34 添付「財団法人豊橋裁縫女学校建物配置図」。

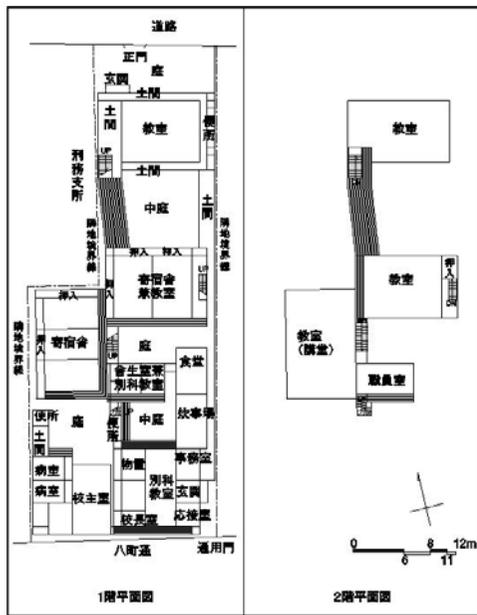


図-13 大正13年 校舎増築

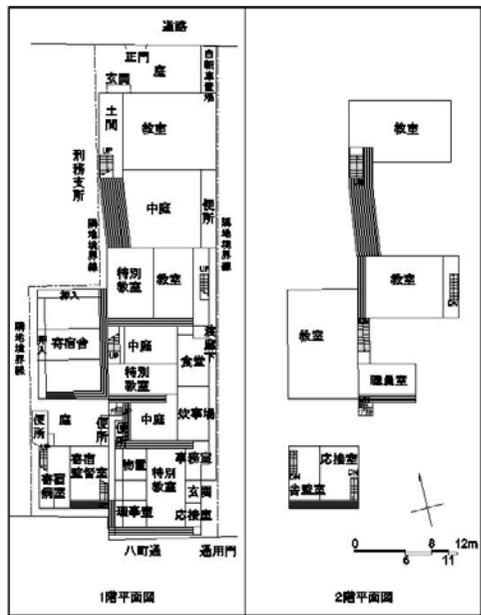


図-14 昭和4年 八町通り一部拡幅

それ以前は1階教室東側にあった便所が教室南側の中庭に出されているので、この齟齬については図面の表記ミスではなく、表-1の教室坪数が実態を反映していないと考えられる。

この時点で既に敷地には建物の増築余地はなくなり、それまで敷地東側の南北方向の動線であった中庭東側の土間に便所が建てられたことにより動線が複雑になっている。職員室から教室の中を通りぬけることなく、屋外に出ずに北側校舎1階に行くためには、職員室から階段を下りた後、便所の中を通過するか、あるいは再度階段を上った後にまた下りる必要がある平面となっている。当時、生徒数の増加によって敷地が狭隘となり、移転を検討していたことが、昭和4年6月12日付「豊橋市長宛陳情書」<sup>13</sup>の記述から確認できる。この後、昭和7(1932)年9月1日に現在の藤ノ花女子高等学校の校地(当時の住所は豊橋市瓦町字臨濟寺前75番地、現在の老松町109番地)に移転している。

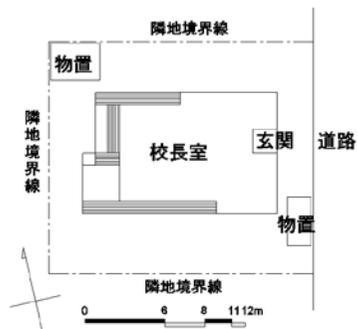


図-15 北側飛び地(東八町253番地)の敷地と建物

13 資料5-33 豊橋市長に対し、当時東八町にあった歩兵第17旅団司令部跡地を大蔵省より豊橋市が払下げを受けた際には校地として借用させてほしい旨依頼する内容であり、さらなる道路の拡張計画があることを理由に「狭小トナリ移転ノ已ムナキニ立至り申スベク」との記述がある。

## 6. 現在の街区との関係

東八町周辺は昭和20(1945)年の豊橋空襲により家屋が焼失し、その後区画整理が実施されている。従って、現在の街区のどの位置が旧校地であったかは『藤ノ花学園史』の記録及び当時の地図等の資料からは特定できない。このため、豊橋市戦災復興誌編纂委員会編『豊橋市戦災復興誌』<sup>14</sup>に掲載されていた「新旧町名界対照図」を参考に、現在の街区と旧校地の関係を確認した(図-16)(図-17)。

その結果、現在の国道1号線は当時の八町通りであり、校地周辺の道路の位置関係は、道路の幅員が広がっている(特に南側と西側)点を除いては、区画整理以前と大きく変わっていないことが確認された。これにより、現在の八町通り4丁目、豊橋鉄道市内線豊橋公園前停留所北東の街区が明治37(1904)年から昭和7(1932)年までの校地のあった街区であることが確認できた。しかしながら、設立当初の校地及び1回目の移転後の校地については区画整理前の正確な位置が不明であるため、現在の街区との関係は明らかにはできなかった。



出典：『豊橋市戦災復興誌』

図-16 「新旧町名界対照図」一部拡大



出典：『豊橋市戦災復興誌』

図-17 「新旧町名界対照図」凡例

## 7. まとめ

本稿により、これまで出版された学園史等では明らかでなかった<sup>15</sup>校舎配置及び校舎の間取りの変遷を明治35(1902)年から昭和7(1932)年までの間について明らかにすることができた。校地については、明治37年から昭和7年までの校地について、現在の街区との位置

14 豊橋市戦災復興誌編纂委員会 編『豊橋市戦災復興誌』豊橋市役所、1958年、pp.256-257「新旧町名界対照図」には、旧街路と新街路が同一地図上に記載されており、区画整理以前の街路と現在の街路との位置関係を確認することができる。

15 当時の校舎の図面に関しては参考文献2(藤ノ花学園 編『創立70周年記念誌 古希』藤ノ花学園、1972年)の中に図-2の図面が創立当時の敷地図として掲載されていた例がある。

関係を特定することができた。校地の周辺環境については、教育上有害との申し入れにも拘わらず隣地に刑務支所が設けられた事実を確認することができた。また、昭和4（1929）年の時点で移転先を探していた事実も明らかにできた。

今後の課題として、創立当初の明治35（1902）年の校地及び1回目の移転後の校地については、当時の住所は特定できたものの、地図では位置を確認できなかった。また、明治36（1903）年より翌年にかけて借用したとされる中八町102番戸の寄宿舎の平面図等の資料も見つからなかった。今後の新資料の発見に期待したい。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり、豊橋市美術博物館より航空写真の画像データの提供をいただいた。また、当時を知る関係者として津田美知子氏と前田伸子氏には予備的な聞き取り調査にご協力いただいた。豊橋創造大学の島田大助教授、筆者の妻敦子には、「公文綴」の書類のくずし字の判読に協力を仰いだ。名古屋大学の西澤泰彦准教授には、当時の家屋坪数の考え方についてご教示をいただいた。また、校舎改築に伴い所在不明となっていた明治から大正時代の「公文綴」の発見にあたっては、藤ノ花女子高等学校事務職員の皆様にご協力をいただいた。ご協力に感謝を申し上げます。

## 参考文献・資料一覧

### 参考文献：

1. 藤ノ花学園校友会 編『藤ノ花学園史』藤ノ花学園校友会，1969年。
2. 藤ノ花学園 編『創立70周年記念誌 古希』藤ノ花学園，1972年。
3. 豊橋市戦災復興誌編纂委員会 編『豊橋市戦災復興誌』豊橋市役所，1958年。

### 資 料：

1. 校舎写真 1916年（大正5年）の卒業アルバムに使用されたもの、藤ノ花学園所蔵。
2. 「豊橋市街地図」12000分の1 山安本舗，昭和初年，豊橋市図書館所蔵。
3. 「豊橋市街地中央部航空写真」1918年（大正7年）頃，豊橋市美術博物館所蔵。
4. 「最新豊橋市街地図 番地入」10000分の1，豊橋市書籍雑誌商組合，1939年（昭和14年）。
5. 「公文綴」（明治35年から昭和7年まで）藤ノ花学園所蔵。

	文 書 名	年 月 日
5-1	「私立学校設立認可申請書」	明治35年3月31日
5-2	「私立学校校地校舎変更ニ付開申」	明治35年6月1日
5-3	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治36年5月1日
5-4	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治37年5月1日
5-5	「私立学校校地校舎変更ニ付開申」	明治37年7月12日
5-6	「私立学校寄宿舎設立ニ付開申」	明治37年7月12日
5-7	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治38年5月1日
5-8	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治39年5月1日

5-9	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治41年5月1日
5-10	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治42年5月1日
5-11	「豊橋市長宛報告書」	明治42年5月17日
5-12	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治43年5月1日
5-13	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治44年5月1日
5-14	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	明治45年5月1日
5-15	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	大正3年5月1日
5-16	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	大正4年5月1日
5-17	「私立豊橋裁縫女学校一覧表」	大正8年5月1日
5-18	「豊橋裁縫女学校一覧表」	大正9年5月1日
5-19	「私立学校規則一部変更ニ付認可申請」	大正9年9月19日
5-20	「学校一覧に関する件等照会 回答」	大正10年1月
5-21	「学事年報取調条項」	大正10年5月
5-22	「獄舎出張所建設位置変更要求ノ義ニ付具申」 (名古屋監獄典獄宛)	大正10年12月
5-23	「伊藤太郎氏宛書簡控」	大正11年10月2日
5-24	「豊橋裁縫女学校一覧表」	大正12年4月
5-25	「私立学校規則一部変更ニ付認可申請」	大正13年3月4日
5-26	「校友会総会報告書」	大正13年11月23日
5-27	「学事年報取調条項」	大正14年5月
5-28	「私立学校調査 報告」	大正14年10月13日
5-29	「豊橋裁縫女学校要覧」	大正15年6月
5-30	「学事年報取調条項」	昭和2年6月
5-31	「豊橋市照会事項への回答」	昭和3年8月14日
5-32	「学事年報取調条項」	昭和4年5月14日
5-33	「豊橋市長宛陳情書」	昭和4年6月12日
5-34	「実業学校設置認可稟申」	昭和4年7月
5-35	「豊橋税務署長宛証明書」	昭和4年7月20日
5-36	「昭和4年度取調条項」	昭和5年4月30日
5-37	「昭和5年度取調条項」	昭和6年4月30日